

国際会議へ参加するという事——第 14 回国際水理学会会議報告

岩 佐 義 朗\*

はじめに

世界各地における文化・言語・思考法・慣習などの共通点や相違点に全く不慣れなわれわれが、貧しい知識と経験のみで行なった第 13 回国際水理学会 (IAHR) 京都会議もつきさきごろの事のように思われるのに、はや 2 か年の歳月がすぎ、昨年 8 月末からの 1 週間、第 14 回会議がパリのユネスコ本部において開催された。日本からの参加者も同伴の夫人を含め 14 名にのぼり、組織委員会発表による史上最大の会議の達成の一助となったことは慶賀の至りである。筆者もこの会議に参加し、単に学術講演会に出席するのみならず、国益が何にもまして優先するという唯一の共通点をもつ日仏両国における国際会議のあり方が、文化・国民性などの相違によって、どのような差を生ずるのかを知りたいものと思った。しかし、IAHR 本部から与えられた職務を遂行するために、それらの一つも行なうことができなかつた。したがって、会議報告といっても、従来のように会議で発表された研究の詳細を紹介することができないが、筆者の経験を通じての国際会議の姿、また、それに関与するわれわれの態度などを述べ、若干の参考に供したいと思う。

会議の概要

国際水理学会の総会会議は、学術講演会・セミナー、委員会、理事会、社交行事ならびに総会とから成り立っている。

学術講演会・セミナーは、あらかじめ定められた課題

表一 第 14 回国際水理学会会議課題と提出論文数

学術講演会における一般技術課題		セミナー課題	
流体内における輸送	46	貯水池内の土砂の堆積とその防止	9
非定常流体力	38	水理構造物のキャピテーション	22
混合砂礫河床の変動	48	氾濫域内の洪水伝播	16
河口における堆積	28	経済的要素も含めた水資源開発	28
		不飽和浸透	12
計	160 編	計	87 編

\* 正会員 工博 京都大学教授 工学部土木工学科

に関する応募論文を中心にして、学術講演会では総括報告形式により、また、セミナーでは参加者の討議によって進められる。今回の課題は、表一に示すように、学術講演会では 4 課題、セミナーでは 5 課題であった。これらの課題は、いずれも主催者側の組織委員会と IAHR 理事会との折衝の結果であるが、会員の強い要望を汲みとった時宜を得たものである。これらの課題に対して選考の結果、論文集に収録された論文数は、表一に示すようになり、一般技術課題について合計 160 編、また、セミナーの課題に対して 87 編の多きにのぼっている。さらに、参会者のために 4 回にわたる特別講演も行なわれた。

委員会としては、学会内に常置されている技術委員会（浸透層水理、移動床水理、基礎水理、流体機械・キャピテーション、氷問題、海岸・海洋、混相流、水資源、ラテンアメリカなど）と、総会時に理事会により指名された委員によって臨時に構成される役員選考委員会とがある。会期中随時会合をもって、それぞれの目標を達成する各種の活動を行ない、理事会へ答申するとともに、総会で報告する。今回の会議では、海岸・海洋、混相流を除いた各技術委員会のそれぞれの委員長から報告が行なわれ、各委員会の抱負と今後の予定セミナーなどが披露された。

理事会は国際水理学会の最高執行機関であり、会長・副会長・事務局長・理事および顧問から成っている。とくに前三者の職務にある人々は執行委員会のメンバーである。今回の総会で、1972 年 1 月からの 2 か年間、IAHR の新会長に決定した林素造中央大学教授は、1968 年以来副会長の要職にあられ、今回の会議においても会期前および会期中、連日のように開かれる理事会の会合に出席され、副会長として学会の運営・発展のためにつくしておられた。

社交行事といえ、われわれにとって聞きなれない言葉であるが、これは学会、とくに国際学会の運営と発展のためには欠くべからざるものである。学会が同業者の集りであるという一側面からみれば、親交を深めるための重要な場であり、また国際会議においては、主催国の文化を参会者に認識させる最高の手段であるからである。この点、世界文化の担い手をもって任ずるフランスは技

目なく社交行事を行なっだし、また行ない得たといえよう。エッフェル塔屋におけるレセプション、間接照明に輝く夜のベルサイユ宮殿の見学とそれにつづく深夜の花火、シャイヨ宮における大宴会、また婦人プログラムにおけるファッション・ショーの見学などである。いわゆる観光旅行者が通常経験するもの以外を要領よく並べたのはフランスならではと思われる。講演会を抜け出し、婦人プログラムに特別参加した男性参会者も目立って多かった。

1週間にわたる各種の催しがほぼ終る金曜日の午後、IAHR では総会をもち、閉会式へと移っていく。総会では、会長の挨拶とその抱負、役員選考委員会の新役員推薦とその決定、各種会議、セミナー、シンポジウムの今後の開催予定、各常置技術委員会からの報告、事務局長による一般事務報告、会長ならびに会長夫人からの挨拶などがあつた。いずれも手際よく運ばれたが、とくにDaily 会長の話術と議事進行のうまさが目立ち、近來にない、すばらしい総会であつたと思つている。1972年1月に発足するIAHR 新理事会のメンバーならびに次回開催地は、すでに土木学会誌56巻11号(昭和46年11月)のニュース欄に紹介されている。ヨーロッパの歴史と伝統に輝くIAHR の新会長に日本の林泰造教授が選出されたことは、水理学の研究という舞台を通して、新しい世界の胎動、歴史の変遷が感じられる。とくに、それがヨーロッパ、世界文化の中心であるパリにおいて行なわれたことに大いに意義があろう。

### IAHR の会議とそれへの参加

国際水理学会の総会は2年に一度世界の各地で開催される。開催地の決定は、開催希望国の招請にもとづき、IAHR 理事会によって行なわれる。世界の国々の学術・文化交流が盛んになればなるほど、希望国は増加するであろう。一方、その開催にあたっては多額の経費が必要となり、本来単なる一学会の集りも国家的な規模にまで広がっていく。逆に、国家の財政的な余裕の度合いが開催を制約することになる。

「水理学の研究とその環境へのかかわりあい」というスローガンのもとに開催された今回の会議の課題決定手順はすでに述べた。われわれがさきに主催した前回の京都会議のそれも同じ手順であつた。一方、次回のイスタンブール会議の課題はまだ予告されていない。各種の技術委員会では、それぞれに関係の深い多くの要望課題をもっている。しかも、毎年、理事会に技術委員会委員長の出席が要求されている今日、決定手順にもなんらかの変更があるとみるのが至当であろう。もちろん、会長の最終的な判断によるが……。したがって、国際会議の開

催にあたって財政的な面倒をみるから、そのかわりに開催国の要望する課題を採択せよというような安易な考え方は、もはや適用しなくなるであろう。

IAHR は主として個人会員から成り立っている。会議も水理学の研究に興味をもつ個人の集りである。しかし、財政的援助が国家的ないしは公共的機関によって行なわれ、またその規模が大きくなるにしたがい、個人の集りと援助組織との関係が複雑になり、往々にして政治的な問題がからみ込んでくる。また、個人会員といつても、その個人の所属する社会の構造・習慣・役割などによって参加に対する度合いが著しく異なる。個人としての活動が大きな要素を占める技術者・研究者間では、総会・会議のいずれも自己の売り込みの場である。より恵まれた研究・生活環境、より高い社会的地位をうるため単に講演会・セミナー・レセプションへの参加のみならず、委員会活動・ロビー活動などが活発に行なわれる。一方、日本人の会員のように、所属する社会・組織に対する帰属性が強く、会員という資格はその社会的地位、つき合い、また学会誌をうる手段に用いられる場合には参加の目的が異なり、講演会そのものや見学旅行のほうへ主眼が移される。このような両者の違いは、個人の所属する国の政治体系にはよらず、その人の所属するさらに小さい社会組織ならびに、個人に課せられた役割によることが多いようである。

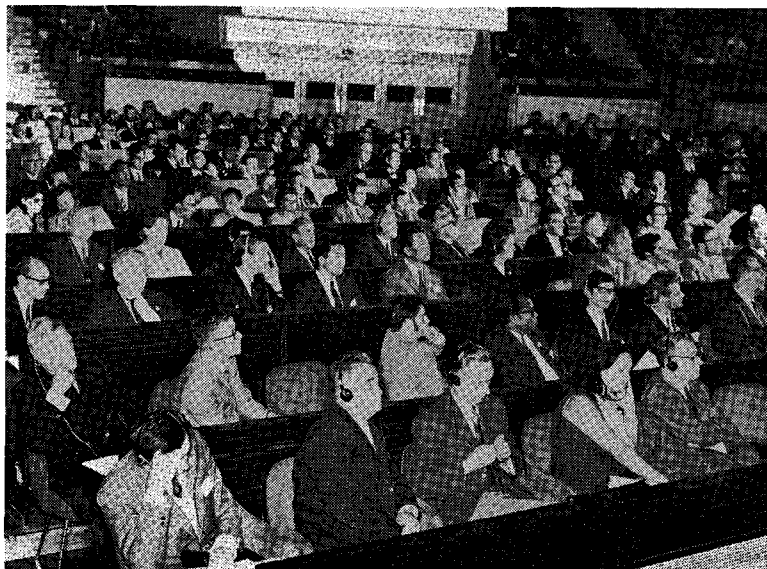
単なる一会員として会議に出席する場合には、その個人の立場によって、どのような参加態度を示そうが、会議の運営や学会の発展にはなんら支障はない。ところが学会組織の内部において、なんらかの活動に参加しなければならないとなると、上述の両者のくいちがいが明らかにされる。

従来、IAHR の総会に参加した多くの日本人は、後者の立場をとる、いわば消極的な参加を行なっていたようである。わが国における水理学の研究がより活発になりより世界的になれば、日本人会員の一人一人が、好むと好まざるとにかかわらず学会内部の活動を行なうように仕向けられるし、またそうせざるを得ないだろう。1971年8月現在、IAHR の日本人個人会員数は180名に達し、アメリカ合衆国に次いで第2位である。このことは上述の事実をより加速し、理事会のみならず技術委員会にも多くの委員を送り出している根拠である。

筆者の所属している基礎水理技術委員会は、今回の会議中連日会合をもち、委員会の活動分野、当委員会が中心になって行なうべきシンポジウムなどの開催計画、第15回IAHR 会議の技術課題に対する要望などについて討論を重ねた。一方、第9,12回会議について、筆者は今回の役員選考委員会委員として、林会長を中心としたIAHR の新執行部誕生の一助を担った。個人的な

集団的な、あるいは国力を背景とした、もろもろのエゴイズムに悩まされもしたが、結局のところ、もっとも筆者にとって困ったことは、会議や学会に参加する心がまえや態度であった。言語・思考・習慣などの異なる世界の人々のもつ願いを、単に算術平均的な操作によって満たすのではなく、より高い次元から、それをかなえるには、個人の目標達成の活動と所属組織のそれとが、つねに共鳴しているような能力と行動力を備えた人が必要とされるであろう。とくに、国際学会のように、経済力も権力もないところでは、それが痛感される。われわれもこのような現実をはっきりと見きわめ、一

人一人がそれにふさわしい人間になるようつとめなければならぬ。それが、林新 IAHR 会長が世界の各会員



第 14 回 IAHR 総会 風景 (荻原国宏氏・提供)

の要望を担<sup>に</sup>って水理学の研究を指導されるためにも、大きな支柱となるであろう。(1972.1.10・受付)

●内閣総合賞受賞

## 国民生活と国土の未来像

—30年未来へのあゆみ—

21世紀研究会グループ著(代表・鈴木雅次) ¥9,500

国民生活の設計/健康像と保健医療構造/労働/生活構造/教育/文化/生活基盤と福祉/社会福祉/国土の設計/大都市/中都市/農漁村

## 構造物基礎の失敗例 —その原因と対策

K. チェッキー著/宮川房夫訳 A5判・224頁 ¥1,300

事故や失敗は洋の東西を問わず多くの点で共通のものが多。わが国の基礎工事においても、これらの破壊例とその解析は有益な参考資料となるであろう。

## 都市交通講座・全5巻

編集委員 = 井上孝・岡野行秀・増井健一・八十島義之助

- |           |        |
|-----------|--------|
| ① 都市と交通   | ¥1,500 |
| ② 交通と経済   | ¥1,500 |
| ③ 交通計画と技術 | ¥1,500 |
| ④ 交通計画の実際 | ¥2,400 |

## トンネル工学 —理論・設計・施工—

K. チェッキー著/島田隆夫訳 ¥5,900

## 土圧を受ける構造物設計の要点と計算例

川崎迪一・岩松幸雄共著 ¥2,000

## 地すべりとその対策

デルバ、メンツル共著/松尾新一郎訳 ¥1,700

## 斜面安定工法

日本材料学会土質安定材料委員会編 ¥1,900

## 土木施工システム論

矢野信太郎著 ¥2,000

## 現場監督者のための 土木施工・全10巻

- |                |        |
|----------------|--------|
| ① 現場設計の要点      | ¥1,400 |
| ② すぐに役立つ測量     | ¥1,500 |
| ③ 分りやすい基礎工法    | ¥1,200 |
| ④ コンクリートの施工の要点 | ¥1,200 |
| ⑤ 安全施工の要点      | ¥1,400 |

明日を築く  
知性と技術

鹿島出版会

107 東京都港区赤坂 6-5-13 電話 582-2251 振替東京180883